

## 版画を始めた頃のなまけものの思い出

私が版画<sup>が</sup>を始めてやつたのは中學を出てからのことです。もうかれこれ十年前にもなりませう。何でも刀は一本しか持つて居ませんでした。それは亡伯父が若い時に使つたといふ細い印刀で、今でも持つて居ます。先づ下駄の齒入れ屋から朴<sup>ほお</sup>の板を買ひました。それに何を彫つたかといふと、髪を銀杏返しに結つた女が蛇の目の傘をつぼめて片手に持ち遠景には帆掛け船が見える、といふやうなものでした。刷り方も何も解らないので、煙草盆の灰吹き<sup>ふた</sup>の蓋を持ち出して、それを布にくるんでこすったり、逆にして版木を疊に嘗ててこすつたりしました。

きのしたもくたろう 木下奎太郎氏の「和泉屋染物店<sup>いずみやそめものみせ</sup>」の口繪がこんな繪を彫る動機となつたやうです。

友人の Y- から、今考へて見れば駒すきの細いやつですが、それを 貰つて随分便利だと思ひました。が、それは直になくしてしまひました。Y- は私の友人の友人で學校も異つて居たのでしたが、お互に繪が好きなので、よく遊びに出かけました。Y- の家は大工の棟梁でした。それで彼は杉の板切れなんかに無理に彫つて居ました。私もその杉の板を貰つて彫つたこともありました。私には色刷は出来ませんでした。Y- の色刷は、紙に繪の具をぬつてそれを刷る

べき紙の上に當<sup>あ</sup>てて上からこすつて色をつけて居まして。その繪の具をぬつた紙のことを私等は「種板」と稱<sup>しょう</sup>して居ました。

墨の中にリスリンを交ぜるとよいといふことを何處<sup>どこ</sup>からか聞いて來てそんなことをしたこともありました。何でも始めはよく彫らないと悪いやうな氣がして一生懸命に深く綺麗に彫つたりしました。

學校で私等仲間の音樂會がありました。第一回のプログラムは、私が何だか彫つてそれを表紙して半紙に刷つたやうな氣がします。話が少し横道にそれますが、私等の音樂會はプログラムに大變凝りました。プログラムの装畫は私がかき、文字は合田君<sup>ごうだ</sup>(日本に於ける西洋木版の鼻祖たる合田清氏の息子です)が書いて、それを凸版にして、合田君の家にハンドプレスがあるものだから仲間が集まつて刷つたりしました。その頃合田君の家にはまだ木版の工場があつて仕事をする人も何人か居りました。或る時の音樂會には、私の畫いた繪を西洋木版にして貰つてそれをプログラムの装畫に用ひました。恐らく西洋木版の装畫を入れた音樂會のプログラムは今までに日本では無いことだらうと思つて居ます。

西洋木版を合田君のお母さんに習はふかと思つたこともありましたが、十年位やらなければ駄目だといふのでやめてしまひました。

ながせ永瀬さん達の版畫の展覽會を讀賣新聞社の三階で見た記憶もあります。又

永瀬さん達の露店「アカシア」を見に銀座へも出かけました。そして自分もあんなことをしたいなと思ひました。

何分、自分の家に錦繪も何もなく又そんなものを見る機会もなく、刷り方も彫り方も紙のことも解らなかつたものですから、私の彫るのも、ほんの思ひ出した時に彫る位で、数も少なかつたものです。何しろ細い印刀を一本しか持つて居なかつたのですからね。その代はり西洋木版は合田君の家で随分澤山見ました。私は、ただふらふらと太平洋の向ふへ行つて、半年は何もせず毎日晝頃まで寝てばかり居りました。あとの半分はお金がなくなつたのでアラスカへ行つて鮭罐詰さけかんづめの製造人夫をして暮らし又ふらふらと歸かえつて來たのですが日本へ歸つたら木版で千代紙を作らうといふやうな計畫もありました。が悪い癖で何時も何時も計畫ばかりで何も出來たためしがありません。其の頃の手帳の中に「劉吉りゅうきち新千代紙」とみだしを書いて「青海波」「露」などと畫題が書いてあります。私は「平峰劉吉ひらみねりゅうきち」なる變名へんだか匿名だか解らぬものを使つたことがあつたのでした。

日本へ歸つて大正七年の秋でしたが、創作版畫協會の展覽會があるといふので合田君のところの出入りの版木屋で葉書版の櫻の版木を買つて、その細い印刀で「假面舞踏會かめんぶとうかいの歸途きと」といふアメリカ所見のものを一枚彫りました。そして田端においでになつた山本やまもと鼎かなえ氏の家へ持ち込みましたが、勿論のこと

落選でした。

その後、二年程、何といふこともなしに彫らなかつたのですが、今暮らして居るこの田舎へ来るやうになつてから、友人に、下谷に木版用の刀を賣る店があるといふことをきいて、初めて其處で、三角刀、駒すき、あいすきの類を仕入れました。それから引きつづき今まで彫り續けて居るやうな譯わけなのです。

(『詩と版画』第13輯/1925(大正14)年8月6日)